

高校生のためのフランス語 —若手教員の2年間の取り組み—

岸本 聖子

KISHIMOTO Seiko
Université Ritsumeikan
seiko_pommier@hotmail.com

0. はじめに

筆者は2011年度から2年間にわたり、公立高校で第2外国語としてのフランス語の授業運営を担当した。高等学校における教科としてのフランス語は、独特の問題を抱えている。問題は特に、フランス語教員が各学校に1名しかいないということに集約されるが、これまでも言及されているように、高校での第2外国語授業に求められるものは何か、言い換えれば、高校生がフランス語を学ぶ意義は何か、という疑問と対峙することに始まり、授業の最終的な目標設定やフランス語とフランス文化にどのように親しませるかなど、一人で取り組まざるをえない課題が多い。

そのような中で、2年目には「どのように学んだことを発揮できる場を作るか」に焦点を当て、教科書から現実への橋渡しができるよう試みた。

アトリエでは例年ランコントロールで実施されている「若手教員の悩み相談室」の形で、主に筆者の日常的な悩みについて議論した。本稿では主に2012年度の取り組みと課題、そしてアトリエでいただいたコメントについて述べる。

1. 担当クラスについて

1.1 基本情報

勤務校：兵庫県立三木高等学校

担当クラス：MIC（国際コミュニケーションコース）の2～3年生

受講形式：選択科目

授業数：週2時間の連続授業（1時間は50分）、回数にすると年間では20回

生徒数：[2年生] 7名、[3年生] 7名

使用教科書：[2年生] フランス語 2020（白水社）、[3年生] Spiral（Hachette Japon）

Rencontres Pédagogiques du Kansai 2013

なお、MIC 自体の生徒数は 40 名以下の 1 クラスであり、2 年時では選択科目枠に中国語と数学 B、3 年時では生涯スポーツ、フードデザイン、保育、デッサンなどが含まれる。

1.2 受講生徒とフランス語の選択理由

受講生の多くは英語において中級レベルに達しており、短期であれ海外生活経験者が多い。また、ほとんどが大学進学を目指している。その為か、なかなかフランス語検定等の受験には至らないようだ。なお、3 年生の 3 学期は自由登校期間となるため、実質上フランス語講座が展開できるのは 2 年間を通じて 5 学期間ということになる。

筆者は毎年度初めにアンケートを実施し、他の質問事項と共にフランス語を選択した理由を記入してもらっている。教員側が彼らの動機と目標を知ると同時に、受講生側もそれらを間接的に意識することになる。調査では以下のような回答が得られた。

○ 動機

- －英語の他にヨーロッパの言葉を一つぐらい知っておきたい
- －英語に似た文法だと聞いたことがあるので
- －高校で軽く 2 年学んでも話せるようになるとは思わないので中国語でもフランス語でもどちらでもよかったが、せめて旅行できるくらいは話せるようになりたかったので、どちらの国に行きたいか考えたとき、フランスの方が行ってみたかったから
- －将来フランスに行ってみたい
- －大学で第 2 外国語としてフランス語を取りたいから
- －なんとなく
- －アルファベット表記でなじみやすいから
- －大学ではポルトガル語を学びたいが、フランス語はポルトガル語に近いと聞いたから

○ 目標（フランス語で出来るようになりたいこと）

- －フランス語を使って日常のたくさんのお話をたくさんの人と話すこと
- －日常会話を確実にできるようになりたい
- －あいさつ、自己紹介や自分のことを言えるようになりたい
- －フランスに行ってフランス人と話したい
- －旅行用に
- －フランス語を書けるようになりたい
- －今は文字が理解できないがフランス語文を読めるようになりたい
- －文章を読む

以上の結果を観察すると比較的明瞭な動機や学習意欲が伺える（興味深いのは、フランス文化やヨーロッパ文化という側面からよりも、どちらかというと言語的な興味からの選択が見られることである）。それなりの回答を予測しながら勢いよくフランスのイメージを授業内で尋ねると、その期待はあえなく裏切られ、定番中の定番である「フランスパン」という返答がなんとか得られる程度であった。良くも悪くも、ステレオタイプとしてのイメージさえもおぼろげである。これから学ぼうとしている、あるいは学んでいる言語や文化をさらに身近に感じるにはどのようにすればいいのだろうか、また、たとえ授業数が十分でないにしても、折角の学習意欲をどのように維持しフランス語習得につなげられるだろうか。

2. 悩み1： フランス語やフランス文化との距離を縮めるには

2.1 具体的な試み

1年目は教科書を中心にしたシラバスを組んでいたが、2年目では「フランス語とフランス文化により親しむ」ことをより前面に置いた。定番ではあるが、フランス語圏を示す地図の提示、ユーロ硬貨と紙幣の提示、シャンソンや映画を視聴する、といったことに加え、より音声に親しむためにシャンソンの歌詞を教材として使用した。これを実施したのは3年生であるが、発音と綴りの関係をおさらいすることが目的で、主に母音に関して同じ発音記号で表される綴り探しを行い、筆者がヒントを出しながら生徒がリストを作成した。

2012年度は日本語を学べるフランスの高校と新たに連携し、学校単位で交流を開始した。高等学校レベルにおけるフランスの学校との交流活動にはコリブリを始め何種類か存在するが、これは学校同士の個別的なものである。主に定期的に文面あるいはビデオ等によって互いに情報交換をすることを主眼に、今年度は2回のやり取りを行った。

交流の開始が11月となったことから、まずはクリスマス用のグリーティングカードの交換を行った。これは個人作業で行い、季節の挨拶と共に、自分の写真を準備し自己紹介カードを兼ねるものである。2学期末試験終了後の授業時間1回（2時間分）を使用した。具体的な手順は以下のようなものである。

- ①日本語で、書く内容と流れを考える
- ②仏作文をする
- ③簡単な日本語訳を付す（必要があれば追加情報も盛り込む）
- ④レイアウトを整える（必ず写真を添付する）

第2回目はビデオレターの交換を行った。今度はグループ作業とし、主に自己紹介と好きなものを語る、あるいは学校生活を紹介することを目的とした。3学期の後半の授業時間2回（約3時間分）を使用し、準備と撮影を行った。具体的な手順は以下のようなものである。

- ①グループ分け
- ②日本語で、伝えたい内容とその流れを決める

- ③グループ内での分担作業で、内容をフランス語になおす
- ④日本語の翻訳文あるいは追加情報を考える
- ⑤小道具が必要なグループは準備し、撮影

以上の取り組みのうち、シャンソンによる発音学習とフランス人高校生との交流活動は高校生が楽しんで取り組める言語活動として顕著であった。発音練習にシャンソンを取り入れようと考えたきっかけは2年生によるフランス語暗唱コンクールへの参加であった。高校生たちはフランス語の発音を難しいと感じながらも、どちらかという発音学習そのものには積極的で、面白いと感じているようである。シャンソンやスケッチを利用した音の側面の言語活動を、方法、頻度ともに今後の課題としたい。

フランス人高校生との交流活動は、2012年度の最も大きな成果であった。まず、活動内容を数カ月前に予告することでモチベーションが向上維持された。そして、準備期間中は文法内容を復習したり作文の段階でグループ内の友人と議論したりと、活発な取り組みが観察された。また、文章の組み立てなどにも気を配り、一文を翻訳するのとは違い、ディスコースレベルの気付きが見られた。そして、何よりも教科書から離れ、これまで習ったことを思い返しながら知識を現実レベルに引き下ろす作業に刺激を受けているようであった。

2.2 問題点とアトリエ参加者のコメント

特に2年生の授業において映画を見たりシャンソンを聞いたりすることは、視覚や聴覚の刺激によりフランスの雰囲気良く伝わり、生徒も楽しんでた。少し語彙を習得した3年生においては、自分の知っている単語が聞き取れたりすると達成感があったようだ。しかし、2年生のような入門レベルでは素材を通して言語的に習得できるものが少ない。「親しむ」方法はこれで良いのだろうか。

コメント

- ・ 映画などのごく簡単な一部を切り取って、演じてみる、ディクテをしてみるなど、ひと捻りすると素材が生きる。映画を見て見っ放しはもったいない。
- ・ 高校生と同じで大学生もフランスのイメージはあまり持っていない

3. 悩み2： 授業プラン

多くの高校においてそうであろうが、フランス語の担当教員は学校に1人しかいない。大学のように週に何時間も授業があるわけではなく、特にテーマ性のある授業や特定の技能の習得などを求められることもない。モチベーションを2年間維持させ、フランス語運用力が身に着くようにするにはどのようにシラバスを組むべきだろうか。また、目標設定はどのようにすべきだろうか。

3.1 具体的な試み

結果からすれば、2年生を例にとると、試験日を除いた通常授業時間22回中6回程度を教科書以外の活動に割いたことになる。授業外活動は「学んだことを発揮

する場」としての位置づけであり、主に暗唱コンクールへの参加とフランス人高校生との交流活動となった。通常授業での主な工夫は、なるべく多様な言語活動の含まれている教科書を選定することであった。また、進級時にアンケートを取り、前年度習得が難しいと感じた項目を記入してもらい、なるべく授業で反映させるようにした。目標としては3年生でフランス語検定4級の試験範囲の一部に入る程度とされていた。

3.2 問題点とアトリエ参加者のコメント

「フランス語とフランス文化に親しむ」ことを主眼にプランを組んだためか、生徒においては文法の内在化が困難だったようだ。また、体系的な文法を提示することも不足する。

- －つづりと発音の結び付き、及び動詞の活用の習得が困難
- －動詞の不規則活用はどこまでやるか
- －試験作成に関して、フランス語を書かせる作問をするのか、記号問題を多くするか
- －高校で見るにはどのような映画が適切か

コメント

- ・ 高校生は力が付く時期なので、活用を含めて文法などはしっかりやるとよい
- ・ 活用などは方法次第でかなりしっかり取り組んでくれる
- ・ 試験はあまり枠を作らず、書く問題やディクテなども取り入れるとよい
- ・ 日常的に出会う語は、不規則でも数が多くても活用はしっかり取り組むべき
- ・ 教科書を2年で1冊を終わらせるようなプランはどうか
- ・ 目標設定としてフランス語検定4級は大変なのではないか
- ・ 話題になっているフランス映画の他にも、10分程度で終了する短編映画や *Les Aventures de Tintin*、日本アニメのフランス語吹き替え版なども利用できそう
- ・ 文化という言葉の意味の取り方の問題：コミュニケーション上発生するタイプの文化はある程度取り組むのもいいが、まずはフランス語の習得に集中すべき
- ・ DVDを2回に分けて見る

4. おわりに

フランス文化を授業内で取り入れるということは、存外難しいものであった。何をどのようにという問題もあるが、言語能力養成とのバランスも必要である。しかし、最後の授業アンケートでは、ほぼ全ての生徒が教科書外の文化情報及び交流活動が学びたいという意欲を増大させてくれたという意見を書いていた。「同世代のフランス人と会う機会がないので、どんなに些細なことでも興味深い」という意見には勇気づけられた。この2年間の取り組みには反省すべき点も多くあるが、「3年生でももっと頑張ります」「フランス語検定にチャレンジしたい」「大学生になってもフランス語を履修したい」という意見を多くもらえたのは喜ばしいことである。